

モッピ^oー極限ボツチ化

飛沫仏子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファースト幼馴染ことモツピーが究極の剣術を手に入れたようだ。けれども代償に超絶ボツチになってしまった。

きっと主人公が何とかしてくれる！ だから頑張れモツピー！
挫けちゃだめだ！

※題名からも分かるように、ヒロインの一人である篠ノ之箒が結構壮絶な扱いになっております。御閲覧の際はこの点、それから作品タグの事柄に十二分にお気を付けください。

※少し長くなりそうなため、サブタイトル表記を変更致しました。

目次

第2話	8
第1話	1

第1話

——惨めな人生だった。

はつきり言ってしまうおう。私は誰からも嫌われていた。同年代の子供たちに、近所の大人たちに。勿論のこと、家族にもだ。

別に恵まれない家族の下に産まれたわけじゃない。父は厳格で厳しくも曲がらぬ誠実さを秘めた人であったし、母も柔らかく慈愛に満ち微笑みが絶えない人だった。唯一、姉に関してはよく分からなかった。殆ど会話をしたことがないのだ。ただ一言言えることがあるとすれば、私の環境はとても恵まれていたのだと思う。

だと言うのに、嫌われたのだ。誰が悪いかと言えば、誰も悪くはない。強いて言うのであれば、何もかも私が悪かったのだ。

目を閉じれば浮かび上がる。ただの一度も賞賛されず、空虚な栄光しか手に入らなかった私の半生が。

私の家は大きな神社であり、かつ剣道の指南をしていた。剣道道具一式は勿論のこと、大きな剣道場まで私有地として持っていたと言うのだから凄まじい。そんなこともあって、私は物心付いた頃から竹刀をその手にしていた。

切っ掛けが何であったのかは既に覚えていない。もしかしたら決定的な何かがあったのかもしれないし、些細なことなのかもしれない。場の流れで何となく、と言うこともありえる。

そんな臆気な中でも、しかし私が剣を振り始めたと言うのは決定的な瞬間だった。剣を振り始めたこの瞬間にこそ、「私」と言う存在は真の意味で生まれ落ちたのだ。

それから私は剣を振った。只管に振り続けた。

朝起きて剣を振り、外に出て剣を振り、家に帰って剣を振った。寝ぼけ目で臆気な意識の中でも、疲労が溜まり手足の感覚が薄れても、病や熱にうなされても剣を振った。

台風迫る豪雨の日も、日の光が照りつける猛暑の日も、極寒にほど近い氷点下の日も剣を振った。

何日、何週間、何ヶ月、何年と休むことなく剣を振り続けた。

努力する姿を、父は、母は快く思ったのだろうか。多分恐らくは思っていた筈だ。最初こそ、父も、母も、姉でさえ努力する私を褒めていた。霞む幼い記憶の中に、ぼんやりと残っている。そんな気がする。

だが、それ以上に関わり合いにならなかった記憶の方が、私の中に強くこびり付いているのだ。もしかすると、褒められた記憶も所詮は私の願望が生み出した紛い物かもしれない。

どれだけ努力を重ねても、父は顔を顰^{しか}め、母は顔を逸らし、姉に至ってはそもそも私を認識していたかどうかすら分からない。

誰も振り向いてくれない。それを、当時の幼い私はまだ努力が足りないのだと思った。だから、より一層気を振り絞って剣を振った。

両親は、私と関わることにより消極的になった。

幼い私は考える。どうして私に構ってくれないのか。

幾ら努力しても振り向いてはくれない。ならば原因は別にある。

そして私は剣道の大会があることを知った。小学生低学年の頃である。

幼い私は閃いた。幾ら努力をしても振り向いてくれなかった。確かに私の努力が足りなかったのもあるかもしれない。けれどそれ以上に、如何に努力したかを示すことが全く出来ていなかった。

つまり大会で優勝すれば良いのだ。そうすれば私の努力が示される。両親は私を見てくれる。そうに違いないと、私は思っていた。

そうして私は公式大会に顔を出すことに相成った。初めて出た大会は市区町村で開かれているもので、それなりの子供たちが顔を見せていた。

私は優勝した。手応えの程は全く持つて覚えていないが、その事実が程度のほどを表していると思つて良い。

だが、私の両親の反応は変わらなかった。

依然として父は顔を顰^{しか}め、母はぎこちなく笑う。思い描いていたものとは真逆の反応、揺るがない現実がそこにはあった。

幼い私は精一杯考える。どうしてそのような顔をするのか。喜んでくれないのか。

己が答えに至るのは簡単だった。栄光が、名誉が足りない。大会優勝と言えど、所詮は大きくないものだ。

後は想像に難くない。ならばより大きな大会で優勝すれば良い。たったそれだけのことだ。

そうして県大会に出場することになる。前回の大会とは違い、周りの子供たちの意気込みが違って見えた。緊張と興奮が渦巻いているようだった。

私は優勝した。事実こそ覚えているが、この大会も苦戦した記憶は全くない。

だがしかし、依然として両親の反応は変わらなかった。今思えば、寧ろ悪化したような気さえした。

幼く愚かな私は考える。まだ足りないのだと。県程度の大会で満足げに駆け寄った私を、両親とも快く思っていないのだと。

ならば後は転がり落ちるだけだ。地方大会で優勝し、全国大会でも優勝する。そうすれば、ようやく私は認められる。構ってもらえる。

決意を新たにして暫く。家族に亀裂が走った。

後から知ったのだが、どうやら姉が色々やらかしていたようだったのだ。重要人物保護プログラムなるもので、以降私は幾度も氏名を変え、各地を転々とさせられた——無論、単身で。早い話が、私達家族は散り散りになったのだ。

しかし当時の幼い私は、そんなこと理解出来なかった。父、母共に碌ろくに話などしていなかったのに、姉の事情など分かるはずもなく。家族の元から引き離す大人達は、私の否やなど許してくれる筈もない。

捨てられた。その結論に至るのに、時間は掛からなかった。

私は両親の期待に答えられなかった。だから、こうなって当然だった。私は大間抜けだ。初めて預けられた養護施設で新たな「姓と名」を押し付けられたとき、そう思わずにはいられなかった。

今までの私は消え去った。ただ両親の期待を果たす為、剣にのみ寄り添い、剣にのみ生きた私だ。誰も私のことなど覚えている筈もなく、今までの私はたった一体の亡霊と成り果てた。

なればこそ、私はこの時、新しく生まれ変わったとも言える。周り

で遊んでいる子達が、ちよつぱり——いや、とてもとても羨ましく思えていた。だから私も、周りの子達と一緒に遊んで暮らしていけばよかった。

けれども、私はそれをしなかった。否、しなかったのではなく、出来なかった。

どうやって接すればいいのか分からなかった。どうやって輪に入っていくのか分からなかった。私は剣しか知らなかった。

いや、そうじゃない。私には剣がある。私は剣を知っている。

ならばやることは一つしかない。大会。全国大会で優勝するのだ。名誉を、栄光を掴み取るのだ。そうすれば皆私を認めてくれる。私も輪の中に入って行ける。

そうして、私は新たな人生を再び剣と共に生きた。まるで亡霊の執念に取り憑かれるが如く。剣を振り、剣を振って、剣を振る。只管にその繰り返し。亡霊が目指した空虚な光を求め、我武者羅に足掻き続けた。

私は全国大会で優勝していた。誰も近寄らない。

私は都度全国大会で優勝した。けれど誰も近寄らない。

気付けば同じことを五度繰り返し返していた。私は五年の歳月を経て、五回頂に上り詰めた。学校が、先生達が、私を形式的に祝福してくれた。

それでも私は一人だった。学校の朝会で褒められても、私に直接言葉掛けてくれる人など遂にいなかった。

もう私には何が何だか分からなくなってしまうていた。名誉を、栄光を手にし、誉れ高き頂に座して尚孤独。それでも私には剣を振ることしか出来ない。それしか知らない。

五度目の優勝を果たし、そんな中で剣を振る某日のこと。偶然、本当に偶然に、私は後輩であろう二人の会話を聞いてしまった。

「——けど、先輩ってなんだか不気味って言うか……怖い、よね……？」

「それ、分かるかもしれない……全国で優勝してるのに、にこりとも笑わないんだもん……」

私は後頭部を思いっきり殴られたような、強い衝撃を覚えた。恐れられていた。怖がられていた。私が見た栄光の果てには、尊敬もなく、友愛もなく。ただの恐怖しかなかった。

そうして私は全てを悟った。父の響め面の意味も、母のぎこちない破顔の意味も。周りの子達が、私に近寄らない意味も。

私は気持ち悪がられていた。嫌われていた。何故なら、私は化物だから。化物に成り果ててしまったから。

そして気付いた頃にはもう遅かった。亡霊に取り憑かれた化物など、救いようがない。化物が人間の輪に入れる道理などない。

栄光の道と信じたそれは、化物への片道切符。頂の椅子は一人掛けで、周りに人などいる筈もなく。

私は底無しの暗闇に沈んで行った。とても苦しい。言いようのない寂しさが私を襲う。

それでも亡霊は許してくれない。失意の底に落ち尚剣を振る。周りはそんな私を恐がり、気味悪がり、そして距離を取る。良くも悪くも現状は変わらない。

どれだけ苦しくても。どれだけ寂しくても。私は何も分からない。剣を振ることしか分からない。

——世界は私を拒んだ

そんな折のことだった。呆然自失のままに剣を振る私は、進路決定を切っ掛けに更なる輝きを知る。

IS、インフィニット・ストラトスの存在だ。

姉が創り出したというパワードスーツ。そして表面上において、家族の溝に止めを刺した代物。

重要人物保護プログラムとやらの一貫で、私はそれを専門に扱うIS学園への進学を強制されていた。細かい理由は正直知らないし、あまり知る気にもならない。そんなことなど気にも止まらぬ事実がそこにはあったのだ。

千冬さん、織斑千冬。モンドグロツソ初代優勝者、通名はブリュン

ヒルデ。そして私にとっては、最初で最後の目標となった人物。

千冬さんの人気は凄まじい。ISを用いた決闘において、彼女の右に出る者が一人としていなかったのだ。空を駆る姿は豪快に見えて繊細、剣一つで敵を蹴散らす様は百戦錬磨の体現。まるで化物——そう、彼女は化物だ。私と同じ、化物だった。

だと言うのに、まるで稀代の英傑が如き喝采を受けている。私なんかとは大違いの、絶対的な人気だ。それだけISの大会は大きいのだ。それだけその大会で優勝することは、筆舌に尽くし難いほどに名誉なことなのだ。映えあるなんて言葉すら陳腐なくらい、栄光あるものなのだ。

私には、もうISしかない。身に有り余る栄誉だけが、私を救ってくれる。それさえあれば、私は孤独にならずに済む。そうだ、私には、それしかなかった。

——だから私は剣と生きていく

栄誉なき半生は閉じた瞳の中に、栄誉への決意は心の中に。モンドグロツソ優勝を己に言い聞かせ、ゆつくりと目を開けた。

私は今、IS学園にいる。

初めての教室集合、出来上がって行く人間関係。周りの女子達は新たな出会いに微笑み合い、とても楽しそうに会話を弾ませていた。

当然のことだが、私に話し掛ける酔狂な者はいない。何故なら私は化物だ。人のカタチをした化物なんぞが、人間ごっこをするなど普通は許されない。私はそれを知っている。

教室の扉が開き、一人の女性教師が入ってくる。嘗ての憧れにして今や同類、初代ブリュンヒルデこと織斑千冬その人だ。男子生徒と幾ばくかの寸劇を繰り広げ、教室は笑いに包まれた。

けれどその輪の中に私は含まれない。化物の私には、まだその資格がなかったから。

「二組諸君、私が織斑千冬だ」

だから私は普通じゃなくならなければならない。溢れんばかりの栄光を、その手にしなければならぬ。

「素人であるお前たちを一端の乗り手にするのが私の仕事だ。進級ま

でに私の教えた事を漏れなく習得してみせろ」

さもなくば、私は孤独のまま。孤独は嫌だ。このままは嫌だ。

「無理難題は何一つ言わん。だから出来ることを出来るようにしろ」

けれど、希望があるなら我慢出来る。だからこれは、ほんの少しの我慢の時間なんだ。

「以上だ」

結局今まで通り。やることは何一つ変わらない。亡霊わたしはただ只管に剣を振るのみ。

それでも決定的に違うことが一つある。いわば成功者、千冬さんの存在。それは今までのどんなものより明らかな道標みちしるべとなって私を導いてくれる。

「次、篠ノ之」

「はい」

溺れる程の名誉が欲しい。気が狂う程の栄光が欲しい。

例えばそれが仮初だろうと泡沫だろうと、ましてや偽物だろうと一向に構わない。

「篠ノ之箒、特技は剣術。将来モンドグロツソで優勝する為にここへ来た。織斑講師の様に私はなりたい」

それが私を救ってくれる。そうでなければ、私はいつ救われるのだろうか。

「以上だ」

皆の視線は、私になど向いてはいなかった。

第2話

自己紹介込みのホームルームも終わり、皆は思い思いに集団を作る。小さな輪、大きな輪。それぞれ大きさは異なっている。

勿論私が何処かの輪に属していることなどあり得ない話である。でも、それもモンドグロツソで優勝するまでの辛抱だ。我慢するのはもう慣れたものだった。

ならば、今やるべきは鍛錬だ。ほんの少しの時間も無駄にはしたくない。

次の授業開始まで約二〇分。剣を振るには少し忍びない。それでもこう言った中短時間で己を研磨する手段は、それこそ剣を扱わずとも幾通りか存在した。

私は再び目を瞑り、しかし今度は心を無に変えていく。

そこに世界が存在するように、世界に私が存在する。そして私の周りを取り巻くのは、ただあるがままの自然。或いはただあるがままに自然があるからこそ、私はそこに存在する。

それを感じ取るのだ、耳で、肌で、心で。そうして自然と私が一体であると認識したとき、私は自然となる。身の回りのありとあらゆる流れを理解する。

早い話が第六感だ。人の無意識を意識的に起こすことで、私はすぐその未来で起こるべき「結果」を先読みしているのだ。

たった二〇分、されど二〇分。満たされる全能感すら自然の一部とし、第六感を何時もより一步先へと研ぎ澄ます。

教室の外で女子生徒が挙こぞって集まっている。彼女らの視線は一点に集中していた。その視線の先には、このクラスには何故か一人しか存在しない男子生徒。教室全体に意識を向けてみると、どうやら教室内外問わず大凡の女子生徒はその男子生徒を熱心に見つめているようだ。件の男子生徒はと言えば、何やら苦悶の表情を浮かべているようだった。

ふと男子生徒の視線が動く。その視線の先には……私？ いや、そんな馬鹿なことはあり得ないはずだ。何故なら私は彼を知らないか

ら。私の知らない相手が、化物何ぞに興味を持つなど天地がひっくり返ってもあり得ない。

化物の境地に足を踏み入れたと思ってはいたが、ことこの技術についてはまだまだまだ練度が足りていないようだ。より一層気を引き締め

て――
「なあ、やっぱりお前、箒なんだろ……？」

――っ!?

ど、どういうことなんだ。訳が分からない。

私は化物だ。化物が人間に戻れるはずがない。

事実ただの一度だって話しかけられたことはない。

嘗てただの一度だって賞賛されたことはない。

当然、それが化物の末路だ。

だからこそ、見るも悍^{おぞ}ましき化物へと堕ちた私は、それでも自分が自分だと胸を誇る為に、モンドグロツソと言う大会で優勝しなければならぬのではないのか。

人と対等に話すのはそれからではないのか。

ならば。

この状況は、一体何なんだ？

「自己紹介でも言ったけどさ、一夏、つて名前。やっぱり覚えてないか……？」

覚えてないか、だって……？

そう言えば、目の前の男子生徒は亡^{わたし}霊の名前を語っていた。

亡霊となる以前の私を、覚えていると言うのか。

家族に嫌われ、周囲にも目を向けなかった私のことを。

それこそ信じられない話だ。

だって、亡^{わたし}霊何かを覚えているだけの理由がない。

「……なあ箒、せめて、返事だけでもして欲しい。それとも……やっぱり、俺と会話するのは……」

あ、ああ。そう言えば彼には気をつけてるだけだったな。

返事を返していないどころか、顔を向けてすらいない。

折角私なんぞに声を掛けてくれているのだ。なんとか、何とかして

会話しなければ。

あれ。

でも、こういうときって、何を言えればいいんだ？

こんにちは、か。いやでも、もう既に彼から話し掛けてきてくれるんだ。少しばかりおかしい、かもしれない。

では、久しぶり、だろうか。あれ、そもそも久しいとは、どの期間からどの期間までを言うんだ？ 今ここでそれを言っつて、果たして本当にいいのか。

分からない。

分からない。

そ、そうだ。ならばあれだ。何時も私が政府の者に接しているようにすればいいのではなからうか。

ああ、これは案外と妙案かもしれない。話し掛けられて舞い上がりそうな気持ちを抑えつけるんだ。なんだ、思えばいつも通りじゃないか。

思い立ったが吉日と言うし。よし、そうしよう。

「——なんだ？」

空気が死んだ。

あ、あれ………どういうことだ………。何故皆して黙り込んでいるんだ

………!?

分からない。

分からない。

や、やはりあれか。私が口を開いたのが悪かったのか。状況的に考えて私の開口が影響を与えているとしか思えないから、そうなのだろう、きつと。

……いや、冷静に考えてみる、私。人間が語らってる中で、化物が口を開いたんだぞ。状況など考えなくともそれが原因であるなど火を見るより明らかではないか。

あ、ああ。なんて私は駄目な奴なのだろう。人に話しかけられただけで舞い上がってしまった。当初の目的すら頭の隅に追いやってしまった。現実は何時だつて非常なのだ。気を引き締める。

」
」
」
」

徐々に周囲が語らい始めた。同時に化物は自然の流れで排斥される。あるべき姿に戻ったのだ。

己を鍛えろ。己を極めろ。そして頂点に立て。

それが、それだけが、私を救う唯一の――

「箒、ごめんっ！」

「あっ」

唐突に、目の前の男子生徒が私の手を取った。男子生徒は駆け出して、釣られて私も駆け出した。

周囲のざわめきは一層激しく、私の困惑も嘗てない程に大きくなる。何が起こっているのか、現状を上手く理解出来ずにいる。けれど。

掌から伝わる男子生徒の暖かさが、私の全てを包み込んだ。



男子生徒に引かれるがままに、私達は屋上へと辿り着いた。空は憎らしい程に晴天で、透き通る海は地平の果てまで続いている。

」
」

」
」

そんな清々しい環境の中で、しかし私と男子生徒の間には、まるで濃い霧が掛かっているような、そんな隔たりが生じている。

けれど、返って私は冷静になれた。過去を振り返り、現実を目の前に叩きつけられて、私という存在が如何に受け入れられ難いかを再確認できたのだ。化物が人の輪の中に入ろうなどと、普通ではない。

そして、こんな私でも一つだけ分かったことがある。この男子生徒は、余りにも優し過ぎるのだ。例え敵であろうと味方であろうと、果ては人であろうと人外であろうと、何食わぬ顔をして手を差し伸べる

ことができる。きっと彼はそういう人なのだ。

だから私なぞをここに連れてきたのも、きっと一時の気の迷いなのだろう。優しいが故にこんな化物わたしに手を差し伸べてくれた。化物わたしの手を握ってくれた。

「——少しばかりよろしいだろうか」

だからこそ、気になったことが一つだけあった。私なんかに分かるはずもなく、男子生徒だけが知り得ることが。

その疑問を解消して、彼との関係はこれで切り上げよう。こんな化物わたしに、最低限人として接してくれたのだ。感謝こそすれど、これ以上関わってしまったては流石に彼の身が持たない。その優しさに、私は甘えるべきではないのだ。

「な、何だ……？」

今まで人のことなど何も分からなかった私でも、彼が酷く緊張しているのが伝わった。やはり彼は化物わたしなんかと関わっていい人ではない。その優しさを、もっと他の人へと向けていって欲しい。だから。

最後に一度だけ、人として接する私を。その優しさに今一度甘える私を、どうか許して欲しい。

「——貴方は、私を知っているのか？」

幼い頃に『死んだ』、亡霊としての私の疑問。

目の前の彼は、目を大きく見開いた。

「当たり前だろ！」

そして次の瞬間には、大きく咆哮していた。

心の中が、とても温かくなった。こんな私を、父母、姉ですら認識してくれなかった私を、彼は覚えてくれていた。今までの私の存在を認めてくれること、それが何より嬉しかった。

「箒は昔から俺の『憧れ』だったんだ！ そんな簡単に忘れるわけ無いだろ！」

え………っ？

「あこ、がれ………？」

「そうだよ！ 俺にとって、箒はどんなに辛くても、どんなに苦しくて

も、一生懸命頑張って竹刀を振る！ 頑張って努力する！ そんな
かつこよくて、強い女の子だったんだ！」

覚えてくれている、だけじゃなかった。

誰からも嫌われた、こんな私を。化物の階段を登るだけだった私
を。彼は、憧れてくれていた。

「それだけじゃない！ 名前は違かったけど、剣道の全国大会で五回
連続優勝したの、あれ箒だろ!？」

驚愕のあまり、今度は私は目を見開く。

「やっぱりそうだ！ そんな凄いこと出来るの箒の他に誰がいるんだ
！」

今まで、誰からも賞賛、されなかったのに。

彼は、こんな私のことを、『すごいね』と、褒めてくれるのか。

「そんな、とつても強くて、とつても頑張り屋で、とつても凄い！ 俺
にとつて箒はそんな女の子なんだ！ 忘れるやつなんて、憧れない奴
なんているわけ無いだろ！」

目頭が熱くなる。目を抑えずにはいられなかった。

動悸が激しくなる。呼吸を整える余裕はなかった。

私の歩んだ化物の道を、認識してくれた。肯定してくれた。賞賛し
てくれた。私の欲しかったモノを、彼は全てくれたのだ。

生まれて初めて、心の底から満たされた。彼にとつては当たり前
のモノかもしれないが、私にとつてはかけがえのない宝物だ。

「そう、か……っ」
だから。

この温かな気持ちに、彼の前から去ろう。

こんなどうしようもない私を彼は慕ってくれている。けれど、私と
一緒にいれば、きつと彼に迷惑が掛かってしまう。

彼が私を人として見てくれていても、所詮私は化物なのだ。そうあ
るものだと見られているのだ。

私なんかでは、彼とは釣り合わない。

「待ってくれっ！」

彼は咄嗟に私の手を掴んだ。

「離してくれ」

「なんでそんな寂しいこと言うんだよ！」

ああ、私はなんて駄目な奴なのだろう。不謹慎にも、この状況に心が浮ついてしまっている。全てを否定された私なんかを求めてくれて、心の底から嬉しいと感じてしまっている。案の定、ニヤけてしまふのを抑えられない。

でも、このままではいけない。彼は人、私は化物。そもそも住む世界も、見る世界も違っている。

もう大丈夫。私は十分、沢山のモノを貰ったから。

「私なんかと一緒にいたら、君はきつと周りから良くない目で——」
「周りの目なんてどうでもいい！」

彼が私を見てくれている。離すまいと、必死になってくれている。

でも、駄目なのだ。私なんか、彼の隣に立ってしまつては。

「……駄目、なんだ。このまま一緒にいたら、君は必ず後悔する」

「そんなわけない！ 後悔なんかしてやるものか！」

私の瞳を彼の双眸そうぼうが射貫く。その奥に秘められた執念は抑え切れない程に膨れ上がっていて、溢れ出たそれが私の体を駆け巡る。

ああ、そんな目で私を見つめないでくれ。

「他人が何だ！ 人の目が何だっていうんだ！ 昔っから憧れてた女の子とやつと面と向き合つて会話出来たつてのに、これつきりで終わった方が一生後悔するに決まってるんだろ！」

彼は大きく咆哮する。その口から紡がれる一言一句が溢れ出る感情の鎖となつて私を縛ろうと襲いかかる。

そんなことを言われてしまつたら、離れ難くなつてしまふではないか。

「俺は……っ、俺は！ 箒が可哀想だから構つてるわけじゃない！ 箒だから話がしたい！ 箒だから一緒にいたい！ 箒だから、こうして関わり合つていきたいんだ！」

強く強く私を求めてくる。未だ榮譽を手にしていない、ただの化物の私を、彼は必要としてくれている。

「だから、箒っ！」

私は――

「俺と、友達になってくれっ！」

私は、彼の隣を歩いてても良いのだろうか。

「……………うっ、うう」

もう限界だった。一生懸命堪えていたものが崩落し、体の奥底から滂沱の如く涙が溢れだす。

足腰から力が抜けてしまい、最早立つことすらままならぬ。惨めにも彼の胸に体を預ける形になってしまった。

「ありがとう、ありがとう……………」

それでも、彼は恨み辛みを何一つ言うことなく、私を支えてくれた。その両腕はとても大らかな様相で私を包み込み、彼の体から直接伝わる体温がとても心地よい。

ああ、人と触れ合うことのなんと素晴らしいことだろうか。

目で求められ、口で求められ、そして全身で求めてくる。こんなもの、困る。そんなことをされてしまっっては、私の決意は脆く崩れ去ってしまうのではないか。

どうか、こんなにも軟弱で心の弱い私を許して欲しい。私は今、彼の隣に立ちたいと、強く思ってしまった。

「……………でも」

――だから、今暫く。

私は、彼から離れよう。

「駄目……………駄目なんだ」

今の私は、彼に相応しくない。化物の私には、彼の隣に立つ資格すらない。

「……………えっ？」

その資格を得るために、私はモンドグロツソで優勝するのだ。そうして手に入れた栄光を翳し、化物でも人の隣に立てるのだと、証明し

てみせるのだ。

そうだ。私は高みを目指さなければいけない。モンドグロツソで優勝して、頂に座さなければいけない。

でなければ。

私は一体、何のために剣を振り続けたと言うのだろうか。

「寄りかかったりなどして申し訳ない。でも、もう大丈夫だ」

「箒……なんで……」

彼は呆然と私を見つめている。

こんな私に憧れてくれて。そして、友達になつて欲しいとまで言つてくれた。

「今の私では、君の隣に立つに相応しくない。だから私は、必ずモンドグロツソで優勝してみせる。そして、頂点の座に着いて、溢れんばかりの栄光をその身に浴びてみせる」

だから、彼に相応しい人間になるために。

私は、モンドグロツソで優勝する。

何故なら、それが私の存在意義だから。

「では、またいつの日か相見えよう」

「」

晴れ渡る晴天の下、私は彼に背を向ける。

そしてそのまま、屋上を後にした。